

釧路水試だより



13

—新鋭試験調査船 北辰丸の勇姿—

巻 頭 言

試験調査船 北辰丸 紹介

43年度試験調査事業のあらまし

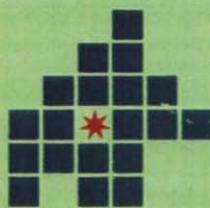
さかなのことわざ

場 員 異 動

昭和 4 3 年 6 月

北海道百年

風雪百年輝く未来



HOKKAIDO 1869-1968

北海道立釧路水産試験場

巻頭言

場長 福原 暁

開道百年の誠に意義ある年に、躍進する北海道にふさわしい名前の新鋭試験調査船北辰丸が室蘭市の檜崎造船所で竣工し、光洋丸の代船として当场に配属されたことはこれ一重に全道関係者のご好意と、ご尽力の賜と心から深く感謝しております。

北辰丸は現在北西太平洋海域でサケ、マス資源調査に従事しておりますが、去る五月十一日釧路において盛大に竣工式、並びに祝賀会を開催して戴いたことに對し関係各位に心からお礼を申し上げる次第です。

北辰丸の船型、諸装備とその性能については既に新聞、その他で報道されかつ本誌に記載した通り画期的な船型と、時代の尖端を行く航海計器、研究用機器を設備し、かつ居住区に最大の配慮をしており、その上優秀な漁撈装置をもつたいわば洋上の移動研究室とも言ふべきもので、恐らく全国の水産試験場の中で最も優秀な試験調査船の一つではないかと自負しております。それだけに、全道水産業界の本船に対する期待は誠に大きいものがあると推察しますので、釧路水試としてはこれに充分応えるよう最大の努力を傾注する覚悟です。

私は、昨年五月場長を拝命した際、釧路水試の将来について種々構想を練りましたが、その中で新鋭試験調査船の建造が大きくクローズアップされております。

想いは二年前の昭和四十一年十月十五日にさかのぼりますが、私は水産庁から派遣され、日本としては初めてソ連とサンマ資源についての共同調査をすべく釧路沖で他の調査員と共にソ連科学

調査船ベラミダ号に移乗しました。その時ベラミダ号の幹部が吾々を乗せて来た光洋丸を見て、あれはこの船かと聞いたので、日本側の通訳がガスパージン福原（福原さん）の所屬している船だと言いますと、日本は随分小さな船でサンマ調査をしているんですねと笑いました。その時私はこれはいけないと痛感したものです。北西太平洋海域は当時既に国際漁場化のきびしさをみせ、ソ連及び韓国の試験船や、漁船があわただしく出没しており、今後益々この様相を激化することは明白で、このような国際漁場において活躍する調査船が貧弱ではその調査結果の信びよう性、その他あらゆる面で対外的に不利になると考え、何としても早急に優秀な試験調査船を建造しなければならぬと肝に銘じたものです。

北辰丸の建造予算獲得、及びこれが設計、建造に当つての関係各位のご努力に對しては心から感謝申し上げます。當場としては二十一年に一度くらいの大事業ですから、当事者はこそつて最大の努力を傾注したと言つても過言ではありません。

北辰丸は五月二十一日から八月上旬まで北西太平洋海域でサケ、マス調査に従事をし、その後同月下旬から十月下旬までサンマ、スルメイカ調査、及び漁海況予報調査を実施した後、今年度最大の試験調査事業である中南部千島東方深海域の底曳漁場開発調査を行う予定になつております。前述したように、これ等の北西太平洋海域は今後益々国際漁場化の様相を強めると思考しますので、同船の就航は誠に時宜に適した意義深いものだと痛感しております。

當場としては全道民の貴重な、そして莫大な血税によつて建造されたこの船を最善つくして保全すると共に、本船を最大限に活用して道東、及び全道の水産業発展のために全力を傾注する決意でありますので、何卒今後共皆様のご指導と、ご鞭撻を賜るようお願いする次第です。

浮かぶ研究室

試験調査船 北辰丸 紹介

北進丸が開道一〇〇年の期待をになつて竣工し、釧路水試に配属されてから早や三ヶ月になります。目下、期待どおりの性能を発揮して、サケ・マス調査に活躍中です。

いづれ、八月中旬からサンマ・スルメイカの調査に従事し、近海で活動することが多くなりますので、機会を求めて各地に寄港し、なるべく多くの方に直接ご覧いただきたいと考えておりますが、ここでまづ、本船の規模、性能、設備等一通りご紹介しておきたいと思ひます。



勇躍処女航海へ（写真1）

一、建造の基本方針と船体構造

試験調査船の場合は、調査研究設備のほか、各種の漁業設備が必要ですから、限られた予算の中で多面的な要求を満すということはそれ自体大変難かしいことですが、一方、技術の進歩は日進月歩の勢いですから、奨来それを吸収して改造、補強し、より性能の高いものにしていく基盤を作つておくことも必要です。

そこで船体、機関、駆動装置、推進器など、いわば船の土台ともゆうべき部分に思ひきつた予算を投じ、この土台のうえに、いろいろな要求を満たしていくことを基本方針としました。

その結果、推進機関は、中速一、〇〇〇馬力エンジンと可変ピッチプロペラを採用し、漁撈装置等はすべて油圧駆動式としたため、二〇〇トン級試験調査船としては、非常に優れ

た性能をもつことになりました。

船型についても、本船はサケ・マス流網漁業、サンマ棒受網漁業、イカ釣漁業、トロール漁業、以東式底ひき網漁業など多くの漁業に従事し、それぞれに高度な性能が要求されるほか、海洋観測や海底調査、生物調査など特殊な任務をもつていますから、これらの諸設備を限られた二一九・五一トンの船型の中にバランスよく収めなければなりません。

とくに前部甲板に一定の作業面積を必要とするサケ・マス流網漁業と、反対に後部甲板に広いスペースを必要とするトロール漁業を調和させることは、大変難かしいことですが、デツキハウスを極力簡素化して甲板作業面積の確保につとめた結果、対立する両者の要求を両立させることができました。また、サンマ棒受網漁業についても、左右舷不对称という珍しい船型になりましたが、これによつて、安全にして十分なスペースが確保できました。総じて、独特な船型とともに、アツパードツキ下スペースがこのクラスの船としては非常に大きくなっているのが、構造上の大きな特長です。

また、いろいろな仕事に従事する関係で、甲板上の装置も多くなりますので、いきおいトップヘビーになりがちです。とくに本船は冬期、北方水域で活動するため、着氷も考慮に入れて、十二分に復元性の確保につとめなければなりません。甲板面積を広くつたことと、デツキ下のスペースを充分つたことから、船殻自体は二五〇〜二六〇トンの船

型に比適するものとなり、その結果、優れた耐波性、耐揺性をもつことができました。

このほか、近代的な冷凍設備、居住設備、調査設備など、総じてこのクラスの試験調査船としては、優れた性能を備えた誇るにたるものと思えます。一般配置図参照

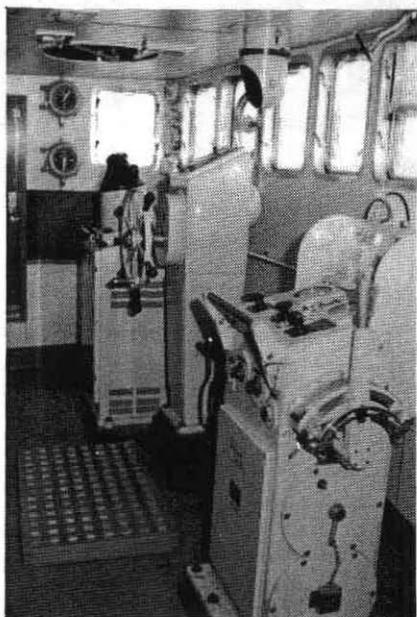
二、航海設備

優れた操船性能は直接漁獲性能の向上にもつながりますが、試験調査船の場合は海洋・海底調査なども含めて、特にその要求度が高くなっております。

本船は可変ピッチペラ（阪神内燃機工業製、減速装置、サーボ機構内蔵型）を採用し、制御装置が操舵室内の一括制御盤に組み込まれていて、プロペラ起動、停止およびピッチ制

目 要

全 長	4 0.3 0	m
長さ(垂線間)	3 6.0 0	m
巾	7.4 0	m
深 さ	3.3 5	m
吃 水	2.8 0	m
総 トン 数	2 1 9.5 1	T
速力(最大速力)	1 3, 3 8 4	K
燃料タンク	1 3 0, 5 0 9	m ³
清水タンク	3 3, 2 3 0	m ³
魚 倉	5 9, 3 7 8	m ³
凍 結 室	5.7 5	m ³
潤 滑 油 倉	4, 3 7 3	m ³
主 機 関	1, 0 0 0	PS
乗 組 員	2 5	人
士 官	8	人
調 査 員	2	人
属 員	1 2	人
予 備 員	3	人



操舵室一遠隔操従スタンド(右)・操舵機(中)・レーダー(左)
(写真2)

航海計器

○ 磁気コンパス (東京計器製 SH 5型)	1台
○ ジャイロコンパス (北辰電気製、北辰プラート CMZ-104型)	1台
○ レーダー (日本無線製 JMA-126型)	1台
○ ロラン (日本無線製 JMA-104型)	1台
○ 自動可聴方向探知機 (大洋無線製 TD-A 120-8M型)	1台
○ 27MC帯方向探知機 (大洋無線製 TD-C 572型)	1台
○ デツカー セナー製	1式
○ 魚群探知機 (産研製 JUP-24型)	1台
○ 風向風速計 (光進電気工業製 K-A-101型)	
○ ファックス (大洋無線製 TF-782型)	1台

御、CCPポンプの運転など遠隔操従するようになっております(写真1 右) したがって操舵室において、主機関を一定、一方回転のまま、速力のあらゆる範囲の微調整と前後進の切換えが、簡単なレバーハンドルの操作で直接制御できるので、港内操船はもちろん、あらゆる海況、気象条件のもとで効率よく調査試験が遂行できます。

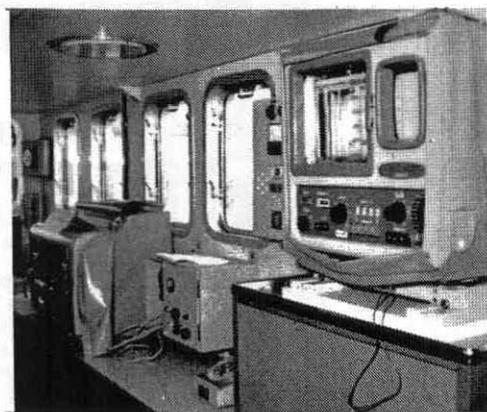
また、操舵装置も非常に近代化されています。つまり、自動操従装置(北辰電機製、PFC12型)が、電動油圧舵取機(川崎重工製)のテレモーター、スタンドに組込まれていて、両者の結合によつて舵取機はテレモーター操舵に、さらに自動直進操舵、自動変針操

舵および遠隔操舵が加わつて、あらゆる操舵の可能な装置となつております(写真2 中央)

以上が直接的な操船装置ですが、これに加えて、次のような近代的な諸計器を備えていますので、両者が相まつて本船の性能は一段と高められています。

この中に、漁船にはあまり普及していないものでファクシミリがあります(写真3 左)

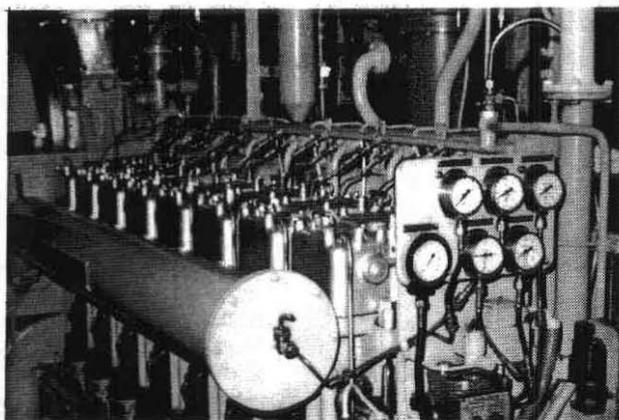
ニュース、天気予報、漁海況予報、速報が天気図や漁海況図まで送られて、スイッチ一つで記録されてくるので大変便利です。将来きめ細かな漁海況放送が可能になつてくれば、漁船には欠かせない設備になると思います。



操舵室一魚群探知機(右)・ファックス(左)
(写真3)

三、推進機関

前述のように、本船は広大な水域にわたる各種の漁業試験調査に従事し、とくに一〇〇米付近までの深海調査も重要な任務になっています。したがって、広い甲板面積とスピード、機動性が要求されますので、小型にして強力な、中速一、〇〇〇馬力のエンジンを採用しました(写真4)



機関室—主機・中速・1,000馬力
(写真4)

機関・発電機

○ 主機関	1 基
川崎—MAN R8V22/30 ALT型 (堅型単動無気噴油4サイクル)	
1,000PS 750r、p、m	
○ 補助機関	2 基
ヤンマー5KI型 (堅型単動無気噴油4サイクル)	
100PS 1,200r、p、m	
○ 発電機	2 基
太洋電気製 80KVA 三相交流 225V	

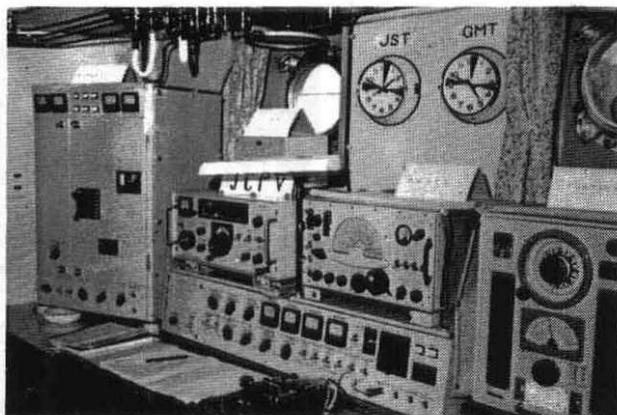
機関の前後進切り換えが不要なので、発停回数は激減し、エヤーと燃料消費量が節減できるばかりでなく、主機関の損耗も少くなっています。

補助機関は一〇〇馬力二基(遠隔操縦装置付)で、これに発電機二基がセットされています。発電機の大きさは、棒受網漁業に従事するほか、キッチン、暖房の電化によつて必要量が大きいので、八〇KVA 2基が装備されています。

四、無線設備

無線設備は、安全確保に欠くことのできないものであることはもちろんのこと、操業の合理化、集団化の要にもなっております。

現在は、資源調査や海洋調査も全国的な組織でおこなわれているので、ここでも推進役として、大きな役割を果しています。また同時に、多数の試験船の調査資料が無線をつうじて刻々と陸上に送られ、その解析結果が、



無線室(写真5)

漁況速報や予報として迅速に漁業者のみならず速報されるといつたように、調査研究の結果の広報にも欠かせない存在です。本船の場合は、とくに活動水域も広大なので、それに対応できるような充分な設備をしました。(写真5)

無線設備

(日本無線製)

- 第1送信機
NSD-1250S型 A₁250W A₂80W
- 第2送信機
NSD-1085F型 A₁85W A₂25W
- 全波受信機 2台
NRD-IEI(18球、3石) NRD-1050KS(15球)
- SSB送受信機
JSB-31A(50W)
- 超短波無線電話
JAA-288/25(25W)

五、甲板設備

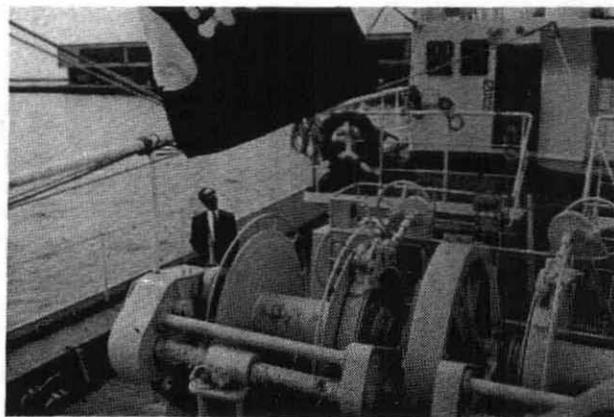
甲板設備

- ウィンドラス 1台
(泉井鉄工製 2.5T×15m/min)
- キャブスタン 1台
(檜崎造船製 2T×30m/min)
- 電気サイレン 1台
(精工社製 SRA型)
- 救命いかだ 1式
(東京トヨーゴム製、甲種膨脹式TRA-15E型)
- ライフボート 1隻
(ヤマハ製、船外機付 FRP型)

六、漁撈設備

漁撈装置は、油圧駆動方式を採用して性能の向上をはかり、魚の運搬には、ベルトコンベアを備えて、作業の効率化、省力化をはかりました。また、集魚灯の支持装置はノ連式(図1)を採用し、操作の簡便化を期しました。

なお、底引き網漁業設備については、試験調査船の性格上、以東式(かけ廻し式)と船尾トロール式の両方式でできるよう設備し、トロール式では、〇〇〇米付近までの深海調査が可能な性能をもたせました。(写真6)



トロールウインチ (写真6)



図1 集魚灯支持装置

漁撈設備

○ 油圧駆動装置	1 式
川崎重工製	
トロールウインチ用 200 PS	
甲板機器、漁撈用 30 PS	
○ ベルトコンベヤー	1 式
小西船舶工業製	
○ 底曳網漁業設備	
・トロールウインチ	1 台
楢崎造船製 6 T × 80 m / min	
・ネットゾンデ	1 式
○ サゲ・マス流網漁業設備	
・ネットホーラー	1 台
泉井鉄工製 0.3 T × 125 m / min	
・送網機 藤田鉄工製 3 PS	1 台
○ サンマ棒受網漁業設備	
・6段巻ウインチ	1 台
鈴木鉄工製 2 T × 24 m / min	
・探照灯 三信船舶製	
5 KW 遠隔操従装置付	1 台
3 KW	2 台
○ イカ釣り漁業設備	
自動イカ釣機	3 台

七、冷凍設備

試験調査船の性格上、対象魚種も多いし、また多目的な利用方法が必要とされますので、装置の自動化、省力化、能率化をはかりました。

つまり、本冷凍冷蔵装置（日新興業製）は、フロン22を冷媒とする高速多気筒機（FV14A）×22KW×1台で、直接膨張式により魚倉、凍結の冷却をおこないます。運転の方法は、手動発停式とし、自動膨張弁直接膨張式により冷媒流量調節をおこない、各種安全装置、各種警報装置、集中監視コントロールパネルの採用などにより自動化、安全化をはかりました。

三区画に分けていますが、種類別に保蔵凍結魚および鮮魚）するたみ、温度条件の異なる冷却が要求されます。この冷却目的達成のため自動膨張弁、ユニコン、電磁弁、蒸気圧力調整器の一連の作動で、温度管理はすべて自動化されています。

なお、温度条件は、冷凍魚保蔵マイナス25℃、鮮魚保蔵マイナス5℃になつております。

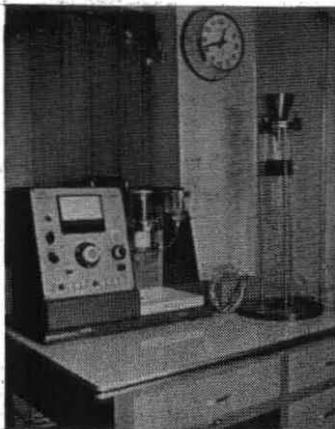
○凍結

アルミ合金製コンパクトフリーザーの採用により、凍結時間の短縮、作業性の向上、製品価値の向上をはかっています。

日産能力は九六〇キロ（10キロバン24枚×4回）、温度条件はマイナス35℃（表面）です。

八、試験調査設備

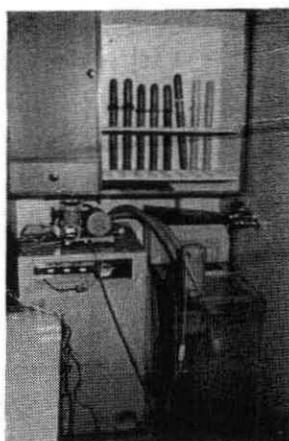
調査海区が拡大され、航海が長期化してきますと、ますます船上でのデータ処理の必要性が高まってきますので、それに対応できる十分な設備をもたせました。すなわち、近代的な諸調査機器の完備をはかるとともに、生物調査を主目的とした調査室（写真7、8）に充分なスペースをさき、また海洋観測機器室を設けるなど、『浮かぶ研究室』の実現をはかりました。



調査室一塩分計（写真7）

調査機器

- 電動測探儀 1台
鶴見精材製 TS-2型 (3.7 KW)
- 顛倒寒暖計、採水器 1式
- 自記水深水温記録計 (B・T) 1台
鶴見精材製
- 自記電気水温計 村山電気製 1台
- 電磁海流計 (G E K) 理研科学製 1式
- 電磁誘導式塩分計 1台
鶴見精材製 TS-E 2型
- 採泥器 1台
離合社製 スミス、マツキンタイヤ式
- 稚魚、プランクトン採集器具 各1式
- 顛倒顕微鏡 オリンパス製 1台
- 万能投影器 1台
日本光学製 20~100倍
- 生物飼育槽 1式
温度調節装置付

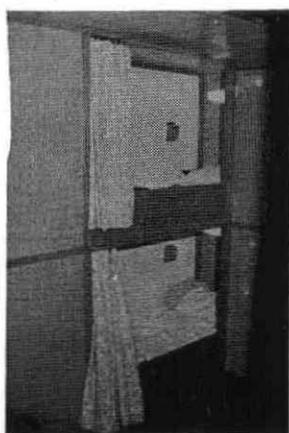


調査室一生物飼育槽 (写真8)

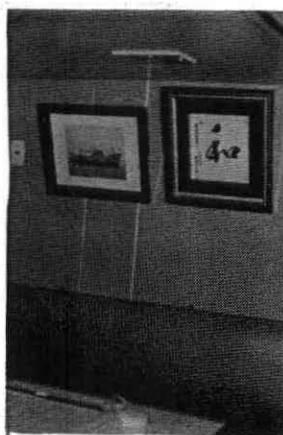
九、居住設備

いかに優秀な試験調査船でも、その性能を発揮させるのは乗組員です。快適な居住性を確保するために充分な配慮をいたしました。つまり、居住区には充分なスペースをとり、余裕のあるベツトルーム(写真9)のほか士官食堂、船員食堂および調査員室乗用の士官サロン(写真10)を設け、電化されたキッチン、風呂など総じて、文化住宅なみと思えます。

また、長期航海においても常に豊かな食生活が確保できるよう、フロン12(R12)を冷媒としたコンデンスングユニットタイプ一台を備えた鮮魚・肉、野菜用糧食庫(内庫1.5㎡



船員室一ベツト (写真9)



調査員室兼士官サロン (写真10)
正面は町村知事より贈られた直筆の色紙

保存温度マイナス5°C、野菜庫2.5㎡、保持温度プラス2°C)のほか、乾、湿の二糧食庫が設けられています。

なお、船内指令装置(日本無線製、スピーカー 筒、W)を備えて、充分な機動性も確保されています。

以上が、新鋭試験調査船北辰丸の概要ですが、私共も、その性能を生かして船名にはじない成果をあげるよう一層の努力をいたし、みなさんのご期待に添えてまいりたいと考えてありますので、今後ともよろしくご支援のほどお願いいたします。

おしらせ

四十三年度試験調査

事業のあらまし

漁業資源部

1. 沿岸漁業資源及び漁場に関する調査研究

この調査研究の五つの事業は、互に有機的なつながりをもつて推進し、道東地域の主要な魚類資源の状態を明らかにして、漁況の予報や未利用漁場、資源の開発をおこない、沿岸漁業の安定と発展を計るものです。

(1) 沿岸漁業資源調査並びに漁業経営試験

ソウハチガレイ、ババカレイ、ヤナギダコ、シシヤモ、ヌイメガジを主対象として、五月から九月にかけては傭船新栄丸（九・八六トン）を使用して分布、移動、回遊および環境などの調査をおこないます。また陸上でも漁獲状況や魚体調査をおこなつて、資源の動向を調査するとともに、ヌイメガジ、ソウハチガレイの漁場調査を継続実施して企業化をはかります。

(2) 底魚資源調査

沿岸資源調査と密接な連携のものと、委託試験船第八訓漁丸（八四・八〇トン）を使

用して、道東沖合の底魚資源の動向とその利用状況を調査し、沿岸、沖合漁業の合理化と恒久的発展をはかるための資料とします。

(3) エビ漁場調査

委託試験船琴平丸（一四・八四トン）を使用して周年調査をおこない、また網略沖ではエビ桁網漁船によつて月二回一斉漁場調査を実施して資源状態を調査します。尾岱沼や厚岸湾のエビ資源調査にも着手する予定です。

(4) ニシン調査

近年、春ニシン漁況は、新しく産卵に参加する若令群によつて支えられている傾向にあります。この群についてはもろろんのこと、総じて移動回遊の状態が不明瞭です。あらゆる漁業をつうじて資料を集めるとともに、困難とされている年令査定法の確立につとめ、漁況予測精度の向上をはかつていく考えです。

(5) ケガニ資源調査

適切な資源管理の具体化が急がれていますので、傭船、委託試験船およびカニ籠漁船の協力もえて、道東太平洋沿岸全域にわたつて、

分布、移動、回遊調査、幼稚仔調査、生物調査、および漁獲統計調査を実施して、漁業の要請にこたえていく考えです。

2. 沖合漁業資源並びに漁場に関する調査研究
今年、新たにスルメイカ漁場調査と沖合底魚資源調査が加わりましたが、沖合資源の調査研究は、対象資源の性質上全国的な組織で進められています。また共通して資源の変動が激しいので、漁況の予報、速報には特に力を入れて実施します。

(1) サンマ漁場調査

陸上調査と平行して、漁期前（北上期）はサケ、マス調査船に依り、八月下旬以降（南下期）は北辰丸で、資源動向や移動回遊の状態を調査します。とくに、資源の変動原因解明の焦点とされている沖合未利用資源の調査を重点課題にとりあげていく予定です。

(2) サケ、マス漁場調査

北緯四八度以南の北西太平洋におけるサケ、マス資源の動向を明らかにするため、四月中旬から八月月上旬まで、北辰丸を使用し、他の調査船十隻と協力して分布、移動・回遊、海況等の調査をおこなつて、日ノ漁業会議の資料を作成するとともに漁況の速報をおこなつて生産に役立てます。

(3) スルメイカ漁場調査

サンマ調査と併行して、分布、移動・回遊等を調査し、道東の沿岸、沖合を北上、南下する群、中南部千島沖およびラウス沖に來遊する群それぞれの相互関係を明らかにして、

漁況予測の精度を高めていく予定です。

(4) 沖合底魚資源調査

本調査は、中南部千島沖の末利用漁場と深海資源の開発をおこなつて、沖合底ひき網漁業の不振を打開し、あわせて沿岸資源の保護をはかるもので、今年北辰丸により十一月中旬から一月にかけて、ウルツブ島沖を重点に海底地形を精査し、トロール漁法によつて資源の分布状態を調査します。

3. 漁海況予報調査

道東海域のサケ、マス、サンマ、サバ、スルメイカ、ニシン等の主な魚を対象に、北辰丸によつて定期的に海洋調査をおこない、また関連諸事業の調査結果も総合して、漁海況予報、速報をおこないます。

増殖部

1. 貝類増殖試験

ホツキガイの天然種苗生産の基礎になる産卵、浮遊、底生稚貝、幼貝などを対象とし、その出現場所と潮流、砂の移動など環境要因との関係を調査します。また移植稚貝の効果についても調査する予定です。(浜中、釧路)

2. コンブ増殖試験

ナガコンブの発芽期を正確につかむために毎月ブロックを投入して調査をします。また漁場内において二年目、三年目から漁獲対象になるコンブがどのような割合で生活しているかを潜水調査をします

(釧路、浜中、根室)。

3. 大型魚礁効果調査

昨年に引き続き、釧路沖魚礁を対象にして特に飼料生物を中心とした効果調査を行ないます。

4. 漁場改良造成効果調査

浜中の変型ブロックは改良同筒型(6・3型)を中心とし、台型や三角錐型についても調査します。歯舞では天然礁も含めた漁場調査を行なつてブロック礁の占める意義を検討することになつていきます。

5. 構造改善事業効果調査

根室のワカメ養殖用沖合保全施設を対象として第二年度の調査を行ない、収量増加の方法と、施設の越冬方法を中心に試験します。

6. 公害対策調査

釧路・白糠海域ならびにこれに流入する河川を対象にした総合調査を衛研・工試・保健所などと共同して行ないます。その他管内の重要河川、工場排水についても監視していきます。

7. その他

各漁協、市町村から依頼されたホツキガイ・ホタテガイ・ウニ資源調査や蕃養試験、コンブ・ワカメ・ノリなどの増養殖試験、シシヤモ・甲殻類などの人工ふ化試験などが山積しています。

加工部

1. 水産物の乾燥に関する試験

近年盛んになつてきた機械乾燥法による合

理的方法を確立するために、原料の特質に合った乾燥条件を試験研究します。今年度はニシン、スケソなど魚類を主対象にし次のような項目をとりあげていきます(十勝、釧路、根室各支庁管内)

(1) 被干物の水分の内部移動

(2) 被干物の表面蒸発と乾燥条件

(3) 乾燥機の乾燥能力

2. 加工技術試験

漁獲物の処理加工中のいろいろな問題を解決するため、処理対策や加工技術について試験をおこない、あわせて皆さんから要望される技術指導も行ないます(十勝、釧路、根室各支庁管内)。

(1) スケソタラ対策試験

フイール冷凍試験、凍干品の利用、スケソ卵製品の改良など

(2) 技術指導

現地での講習会、研修会などを通じ、また要望ある技術開発試験を行なつてその結果を実地に普及していきます。

さかなの ことわざ

「サバを読む」

数をごまかして得をすることを言う。サバを売る商人が相手をごまかしたことから出たとも言いが、ほんとうだろうか。英語でフィッシュ (fish) とは魚のことだがその形容詞フィッシュー (fishy) には「イカガワシイ、アヤシイ」と言う意味がある。あちらでフィッシュー・レコニング (fishy reckoning) と言うのは日本の「サバ読み」と同じ意味。洋の東西を問わずサカナは「ごまかし」に使われているところがおもしろい。

「ウナギのぼり」と「コイの滝のぼり」

「近ごろ物価はウナギのぼりに上る」と言うように何かが急上昇するときに使われる。ほんとうにウナギは川をのぼる。その早さは案外早いし、小さな滝ぐらいなら簡単に乗り越えると言う。これに反してコイが滝をのぼると言うのはまつかなうそ。端午の節句に景気をつけるコイノボリも人間の勝手な空想からうまれたものである。

「狙(そ)上のコイ」

コイは水中ではたいへん威勢が良いが、一度まいたの上のせられると「今はコイ(これ)まで」と観念しておとなしく包丁さばきを受ける。昔はこれが武士の死にぎわに通じると言つてもはやされたが、コイの方でそんなりつばなことを考えるわけではない。元来コイは水中から出して横にするとあまりばたばたしない性質があるからにすぎないのだろうと言われている。

(安富和男著 蟹の泡ふき を参考にしました)

昭和43年度水産関係試験 調査事業協議会が行な われました

五月三十一日と六月一日の二日間、釧路市漁協大会議室と釧路水試において道東管内各支庁、普及所、市町村、漁協関係者と水試との試験研究事業の説明検討会が行なわれました。出席者は四十四名で、水試および各漁協普及員などの計画を発表し合い、互に無駄をふき効果的な調査を行なうように調整をとりながら仕事を進めることになりました。また各地の要望を出し合い水試の今後の計画に組み入れ、あるいは指導を受けられるように検討を行いました。水試事業計画は別掲の通りですが、各地からの要望は相変らず貝類、海藻類など増殖関係が多く、また漁業資源関係ではカレイ、ケガニ、イカ、ヌイメガジなど沿岸資源調査と合理的の利用法について指導を望む声があり、加工関係では人工乾燥試験に対する希望が出されました。なお二日目の午後、希望者による白糠漁協ホツキガイ蕃養施設見学も行なわれ有意義な会議を終りました。出席者各位のご協力にお礼を申し上げます。

